

# しゅう せん か にっ き 周旋家日記 ④ 乾明紀

## 絵師決定—退蔵院襖絵プロジェクト—

退蔵院襖絵プロジェクトは、400年前に描かれた襖絵を模写するものでもデジタルで複製するものでもない。また、ライトアップなどで見せ方を工夫するものでもない。400年前の退蔵院がそうであったように新しい才能による価値創造を目指したプロジェクトである。

この目的のために我々プロジェクトチームは、京都造形芸術大学の中から公募によりその才能の発掘に取組んだ。公募条件は次の6項目である。

1. 平成23年4月から平成25年10月公開まで、すべての生活を制作に捧げること
2. 京都造形芸術大学の学部もしくは大学院を4月時点で卒業していること
3. 基本的に退蔵院に住み込み、数多くの作品を短期間に制作できること
4. 禅の世界を理解し、ディレクターとの協働に柔軟に取り組めること
5. 墨（モノクローム）による線描を得意とし、題材を選ばずに描けること（※特に水墨画に習熟していることは求められない）
6. 将来絵師として自立する決意を有し、かつ指導教授の推薦状を用意していること

平成23年2月、この条件を満たす大学生、大学院生8名の応募があり、ポートフォリオなどによる書類審査を経て、男性1名、女性2名の3名が面接に挑んだ。面接日は3月23日。春分とはいえ、寒さが堪える方丈で行われた。私も同席したが、終始ダウンジャケットを着たまの面接であった。昼の上とはいえ、禅寺は底冷えするものだとつくづく感じた。面接で合格した学生は、この底冷えする禅寺で日々の作務を行いながら襖絵を描いていくことになる。

さて、面接の時間。学生たちの集合時間は朝8時半。まず、妙心寺法堂に向かい、狩野探幽が8年の歳月をかけて制作した雲竜図を眺めることが最初の関門だ。この大迫力の大作を前に学生たちは何を感じるのか。覚悟かそれとも恐怖か。



その後、控室に入り、学生たちは静寂の中、名前が呼ばれるのを待つことになる。面接の会場は、自らが描いた襖絵が納められることとなる方丈である。ひとりひとり呼ばれ、ご本尊を右手に戴いて着座し、面接官より質問を受ける。

面接官は、松山副住職、国立国際美術館学芸員の中井康之氏、そして現代美術作家の椿昇氏の3名。さすがに禅問答はなかったが、面接官は、応募の理由、学生時代に制作した作品への想い、今後の創作活動への覚悟などを尋ねていく。雲龍に睨まれた後の面接は、学生それぞれの個性を引き出されたように思う。創作への熱い想いを語る者、体調の不安を隠しきれない者。そして、ひとり自然体で飄々としながらも創作への想いを語る女性がいた。その女性は、無限に溢れ出るような線画を描く大学院生だ。ポートフォリオに収められた数々の作品や彼女が描く線画からは、寝ても覚めても創作に打ち込んできたことが伝わってくる。それは圧倒的な創作意欲のエビデンスだ。退蔵院は、剣豪宮本武蔵が修行した場所としても知られているが、私は、この彼女が武蔵のように生涯をかけて道を究めていくのではないかと思った。

面接が終り私の体は芯まで冷え切っていた。私と面接官は控室に戻り、このプロジェクトを誰に託すのかを話し合った。そして、度胸の良さと思いきった線が魅力であることから村林由貴さんを絵師として採用することが面接官の一致した意見となった。私が飄々とした人柄と評した村林由貴さんが、退蔵院のお抱え絵師に決まった瞬間である。

この面接から3カ月ほど後、彼女に会い

に行った。彼女は、訪問直前に体験ではない本気の修行を道場で受け、老師からの「あなたになんて描けない」との言葉に座禅しながら泣いたという。そんな辛い経験もあったようだが、副住職から見た修業後の彼女は、自然を見る目がすどくなり、庭を掃くのがとても上手くなったようだ。

この日、彼女は次のようなことを語ってくれた。彼女は高校時代の部活動（ハンドボール部）で冷静にプレーすることができず、「やりきった」と思えなかったことへの後悔から大学での創作に打ち込んだが、周囲には優秀な学生も多く、満足できない日々が続いた。しかし、友人たちが創作する姿を間近で見て「諦めない」気持ちを感じたという。彼女は、これ以降、努力だけでも負けないようにしようと多くの時間を創作に費やした。そうすることで、ようやく4回生になって創作活動の中で「やりきった」を感じられるようになったそうだ。その後、両親を説得し、入学金の半分を賞金で賄うことを条件に大学院に進学し、このプロジェクトと出会うことになる。絵師に採用された今、何を感じているのかを尋ねたところ、彼女は「目の前にあることを一生懸命やっていくとつながっていく」、そして「自分の人生に根性は馴染まない。感謝の心を持っていたい」と語ってくれたことが印象的だった。

面接の日から1年と8ヶ月ほど経過した先日、退蔵院から、村林さんの活動の中間報告をプロジェクト関係者にお披露目する会のお誘いがあったので、久しぶりに彼女に会いに行った。そこには、袴姿で達磨を描く彼女の姿があった。



400年後も襖絵が残るように筆、墨、和紙、建具、表具などを司る一流の職人たちも一堂に集まっていた。このプロジェクトは、一流の職人の技の伝承にも貢献しているのだ。

彼女は今、妙心寺山内「壽聖院」の書院をアトリエに制作活動をおこなっている。

この日は、アトリエとなった書院の襖に描かれた彼女の作品を見せていただいた。そこには、彼女の気持ちと感性が春夏秋冬となって描かれてあった。四季の中に彼女の心の動きが投影されているようで観ていて面白かった。

現在、村林さんを中心に多くの専門集団が脇を固めこのプロジェクトは推進されている。私がきっかけを作ったプロジェクトによって、ひとりの才能が発掘され、職人の技術の伝承と新しい価値創造に貢献できたことは生涯の誇りである。ある学生が「先生がきっかけを作らなかったら、彼女の今はなかったんですよね」と言ってくれたこ

とを思い出し、この日は、周旋家冥利に浸った。退蔵院の襖絵の創作は、間もなく始まるようである。私にはプロジェクトメンバーとしての役割はないが、きっかけを作った周旋家として、これからの彼女の活躍と作品の完成が楽しみでしかたがない。

<退蔵院襖絵プロジェクト 完>

